

ぶっきょう づうしん ぜん あく
仏教通信 『善と悪について』 がつ

世の中に溢れる戦争、事件、事故、不正などのニュースを、毎日、目にする内に、私たちは安易な「あきらめの心」に執われてしまっているように感じます。世界に目を向けるとロシアのウクライナ侵攻、イスラエル軍とハマス（ガザ地区）間の武力衝突が終息の兆しを見せない今、「どうせ何も変わらない」とあきらめの声が聞こえます。しかし、仏教の教えの「諦念（仏教では「ていねん」ではなく「たいねん」）」はただの「あきらめ」ではなく、その先にある「あきらめ」にする道を示しているのです。お釈迦様は、人が苦しみの輪廻から抜け出すためには、まず、物事をありのままに観察する正見を養うことが重要だと説きます。正見とは世界と私の苦しみを直視しつつも、過度な悲観にならず、冷静に状況を理解することです。この正見に基づけば、私たちを苦しめるのは、現象・事象そのものではなく、それに対する私たちの執着の心であることが見えてきます。国家、民族、家族、そしてこの「私」中心の平和を望むという執着心が、世界をより複雑にし、人の業の苦しみを深めているのだと思います。

以前、6年生の「仏教」の授業で、『歎異抄』をテキストとして「善」と「悪」の定義について児童たちに考えてもらう機会がありました。その中で「善悪の定義」は時代や文化によって変化します。例えば「人を殺してはいけない」という倫理観は多くの教え（宗教・道徳・法律）の根幹にあります。それにもかかわらず人類の歴史は戦争や紛争という「殺人」で溢れています。なぜ、どのような文化や地域でも「不殺生」という普遍的な教えを持っているにもかかわらず、人はそれを破り、「正義」や「国家」の名の下に、他者の命を奪っていくのでしょうか。親鸞聖人の「さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべし」という言葉は、人は置かれた状況によってどのような所業も行ってしまうことを示唆しています。「人を殺してはいけない」という普遍的な教えを守るには、単なる倫理規範の遵守だけでなく、私たち一人ひとりが自らの内にある「悪」の可能性を自覚し、謙虚に向き合うことが不可欠と示しているのです。「悪人の自覚」こそ、自分が「正義」であると思い込んで、他者を絶対的な「悪」として断罪せず、共に弱さを抱える人間として認め、許すことで「共に生きる」ことへの第一歩となるのではないのでしょうか。合掌

